

本書の刊行に寄せて

～まほろば塾 塾長からのメッセージ～

奈良県がん医療研究会（MAHOLOBA 塾）（以下まほろば塾）は、専門職が充足しているとは決していいがたい奈良県のがん化学療法提供体制をもっと良くしたい、そのために必要なチーム医療をもっと推進したいという、やむにやまれぬ思いから立ち上がった自主研究グループです。MAHOLOBA（まほろば）の意味するところは、筆者の渡邊先生に語っていただくこととして、その歴史は今を遡ること足掛け7年、とても暑かった2013年の盛夏8月3日に第1回のワークショップを開催したことからはじまりました。以来、半年ごとに臨床現場に即したさまざまなテーマを設定して、継続して活動を続けた結果、研究会開催は回を重ねること13回に至っています。単なる座学ではなく多職種が一堂に会して、職種を超えた参加型のワークショップとして継続することが本会の重要なミッションと考え、当番世話人を中心に歴代世話人の面々がその運営に知恵を絞り、複数回の事前打ち合わせを行い、また県内医療機関だけでなく、県外からも特別講演の講師をはじめファシリテーターやディスカッサントとして多くの医療職の先生方にご参加・ご協力をいただきました。私たちは、このような多施設多職種による情報共有の機会を、その場一回限りの「お祭り」とせず、継続して開催し、その都度高いモチベーションを維持していくためには、ワークショップでの議論や結果を参加者共同の「成果物」として記録に残しておくことが重要であろうと考えています。その1つとして、まほろば塾の活動やその実績は、これまで日本臨床腫瘍学会（JSMO）学術集会において、4つの一般演題として発表されています。しかし、学会の抄録集掲載のみで満足せず、さらに発展して学術論文として世に問うことや、単行本や冊子として参加者に還元できれば、参加者にとっても自身が参加した会を振り返ることで、その成果を日々の診療に還元できるうえ、まほろば塾の役割がより明確になるのではないかと常々考えておりました。

そんな折、今回第10回まほろば塾の当番世話人を務めてくれた、奈良県立医科大学附属病院薬剤部・がん専門薬剤師の渡邊裕之先生が、その回のテーマでもあった「レジメン管理」の議論をふまえて、レジメンマネジメントのつぎを纏めてくれました。本書は、彼の熱い思いが詰まった約190ページにわたる力作となっています。また、上梓にあたり当日特別講演のため神戸から駆け付けていただいた池末裕明先生が監修を引き受けてくださいました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

このつぎが、まほろば塾に参加いただいたご施設のみならず、広くがん診療にかかわる日本中多くの医療機関のレジメンマネジメントに実際に役立つことを期待しています。薬剤師のみならず、できるだけ多くの医療従事者にこの冊子を手にとりいただき、レジメン作成や管理のための実用指南書として活用されることを願ってやみません。

2020年3月

奈良県がん医療研究会まほろば塾代表世話人（塾長）
奈良県立医科大学附属病院腫瘍センター
神野正敏

はじめに

このたび、奈良県がん医療研究会、通称「まほろば塾」において、“がん化学療法レジメンマネジメントのてびき”を作成させていただくことになりました。この“てびき”を作成するに至るまで自分のなかでさまざまな思いがありました。

私は、前職在職中に日本医療薬学会がん専門薬剤師を取得し、院内のレジメン審査・登録を行っておりました。自分がかかわる以前は、使用する抗がん薬が同じであっても、診療科によって使用する予防的制吐療法が異なっていたり、ハイドレーションが不要な抗がん薬に必要な以上の補液が投与されていたり、いわゆる支持療法がほとんど標準化されていませんでした。その結果、不必要な支持療法や、逆に必要な支持療法がないことで患者さんに辛い思いをさせてしまったことを大変後悔しました。そこで、レジメン登録制度の見直しを行い、支持療法については抗がん薬ごとにルールを決めて薬剤師がそれに基づいて設定するよう変更し、支持療法の標準化をはかることができました〔日本病院薬剤師会雑誌, 46 (9) : 1246-1251, 2010〕。奈良県立医科大学附属病院に入職後も、腫瘍センターの神野先生をはじめ、多くのみなさまの協力のもと、レジメン登録方法を変更し、支持療法の標準化を実施し、点滴拘束時間の短縮ならびに支持療法にかかる医療費の削減に貢献することができました。この経験を、まずは奈良県の医療施設と共有できれば、県のがん医療がより充実するのではないかと思います。世話人をしている奈良県がん医療研究会「まほろば塾」を通じて取り組みました。

まほろば塾ですが、この名称の由来は“Medical And HOListic Oncology Brush-up Academy”の頭文字を繋げた造語からきています。本来「まほろば」の意味するものは、ヤマトタケル伝説に由来し、彼が異郷の地で死の床にあるとき、故郷奈良がとても住みやすく良い場所であると詠ったことに由来しています。「MAHOLOBA」の言葉には、奈良の医療従事者の手で、奈良の地ががん患者にとってとても居心地の良い場所にできるようにとの願いが込められています。そんな願いを「奈良県在住および関連のがん患者全員に対し、県内の医療機関において最良のがん薬物療法を提供し、すべてのケアが完結できる」というVisionに掲げて活動しています。まほろば塾は2013年8月3日より年2回開催され、2018年3月31日の開催で10回目を迎えました。その記念すべき10回目のまほろば塾の当番世話人として、塾長である神野先生より私が指名され企画することとなり、前述の想いもあって「レジメン管理と運用について」のテーマで開催させていただきました。研修会の企画・立案を進めるなかで、この研修会を通じて考えたレジメンマネジメントについて、何らかの成果物にできないか、という思いが強くなりました。そこで、自分のレジメンマネジメントの経験、そして今回のまほろば塾のなかで行われたパネルディスカッション、レジメンマネジメントに関する特別講演をいただいた神戸市立医療センター中央市民病院薬剤部 池末裕明先生の講演内容やレジメンに関する資料をもとに、このてびきを作成させていただきました。

このてびきが各施設において、がん化学療法レジメンマネジメントを行ううえでみなさまのお役にたてれば嬉しい限りであります。このてびきの作成にあたり、多大なるご協力をいただきました奈良県立医科大学附属病院薬剤部ならびに腫瘍センターのみなさま、まほろば塾世話人会・参加された先生方、羊土社編集部 中林雄高様、そして支えてくれた家族に深謝いたします。

2020年3月

奈良県立医科大学附属病院薬剤部
奈良県がん医療研究会まほろば塾世話人
渡邊裕之